ある春の朝に～700文字～

小宮山蘭子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ある春の朝に～７００文字～

【Ｎコード】

Ｎ６４６１Ｋ

【作者名】

小宮山蘭子

【あらすじ】

ある春の朝、私は光の中で両親のことを想っていた。それは……

カーテンの隙間から、春の光がふり注いでいた。
階下からトーストの香りが漂ってきて、ベッドの中でお腹がぐぅっと鳴った。
飛び起き、真新しい制服に手を通して、駆け下りる。
新聞を見ていたパパが、顔をあげ、微笑む。
「いよいよだね」
ママは、もう着替えていた。私が選んだ淡いブルーのワンピース姿で、
「急いで食べないと、入学式に間に合わないわよ」
でも、いざパンを手にすると、胸一杯で食べられない。
中学って、どんなとこだろう？
不安もあるけれど、パパとママの笑顔を見ていたら、勇気が出る。
庭では桜が満開。その下で、家族写真を撮ることにした。
肩に回したパパの手は暖かく、つないだママの指は柔らかい。
自動シャッターが、カシャと降りた。

目をさますと、あの日のように春の日差しが差し込んでいる。
けれどもそれは、鉄格子の隙間を縫ってくる弱い光。
そして、ひんやりとした独房の空気。
頬は涙で濡れていた。

あれから数年後、父は友人の借金の保証を被り、膨大な負債を抱え込んだ。
母は鬱病になり、寝たきりの生活となった。
私は進学を断念して働き、母の代わりに家事もした。

だが、何年経っても借金は減らず、悪魔のような取立てが続いた。

ある夜、私は家に火をつけた。
全てが灰になった。父も母も、あの桜の木も。
火は燃え広がり、他にも3人の人が亡くなった。

重い錠がガチャリと外され、看守が入ってきた。
張り詰めた厳粛な雰囲気が、ついにその朝が来たことを告げていた。

夢に出てきた両親の手の感触が、生々しく残っていた。
哀しく残酷な思い出……こんな時に、蘇るなんて。

最期の朝に見た夢は、私が自ら下した罰だったのだろうか。

パパとママのぬくもりを携え、私は足を踏み出した。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6461k/

ある春の朝に～700文字～

2010年10月14日17時14分発行